香貫地域における水環境の保全は

尾藤　正弘

問 今日に至るまで脈々と引き継がれ、地域の生活環境を潤し、住民に親しまれてきた香貫用水について、通水量の減少によるせせらぎの消滅は、住民の生活環境にとって大きな損失であるが、一年を通してせせらぎのあるかつての内膳堀のように復活することができないかとの地元住民の願いに対する考えは。

答 **生活環境部長**／香貫用水を農業用水としてだけでなく、水質や景観等の維持改善を図る環境用水として活用することを目指し、これまで排水路の流量調査や水質検査等を実施するとともに、国土交通省と狩野川の水利使用許可取得に向けた協議を重ねてきたところである。香貫地域における水環境の保全と地域住民のアメニティー向上を図るため、できるだけ早期の環境用水実現に向けて取り組んでいく。

問 母子家庭等世帯におけるこども医療費助成及び母子家庭等医療費助成について、現在は手続を行う窓口が二つに分かれているが、一本化する考えは。

答 **市民福祉部長**／平成二十九年度からこども医療費助成を健康づくり課からこども家庭課へ移管し、助成にかかる申請窓口を一本化する。

小中学校の普通教室へのエアコン設置は

霞　惠介

問 学習の集中度低下や熱中症、食欲不振などの健康対策のために、普通教室へのエアコン設置の必要性に対する考えは。

答 **教育次長**／エアコンがある環境下で育っている子供たちには、夏の厳しい暑さでの学習環境は切実な問題と捉えている。現在、職員室や校長室等の管理諸室、保健室、パソコン室について、全学校への配備が完了しており、図書室、音楽室などについても設置を進めている。市内全校で五百以上ある普通教室については、各学校の環境や校内の風通し、クラスの人数等を勘案するなど、教室環境の実態を把握しつつ整備を進めていく。

問 今後、教育施策を進めるためにも、教育委員会等だけに任せるだけではなく、より多くの子供や保護者、教職員と触れ合うために、市長みずからが学校での子供の様子を参観することは可能か。

答 **市長**／子供たちの様子を直接自分自身の目で見て、肌で感じることは何よりも重要であると思っている。今後できる限り、学校における子供たちの活動の様子を見る機会を設けつつ、状況把握に努める中で、教育施策の推進に努めていく。

古墳と道路の両立に向けた対応は

深田　昇

問 高尾山古墳の現地保存と道路の路線変更という形で両立するために、何よりも重要なことは、地権者を含む地元の住民等に理解してもらえるかどうかであるが、地元の理解を得るために、市長及び教育委員会はどう対応するのか。

答 **市長**／地元の住民等の理解を得ることが重要であると認識しており、今後も教育委員会とともに、さまざまな機会を捉えて、古墳の重要性や価値について理解を得るべく丁寧に説明していく。

問 有識者による協議会において、古墳の西側に迂回する形で、丁字形の四車線道路を整備する案が推奨された。しかしこの案は、東西の地域内交通を無視しており、県公安委員会に認められる条件でもある、地元の理解が得られない可能性がある。このことを明らかにせず、協議会での議論に臨んだことが問題であったと考えるが、こうした状況を踏まえ、今後地元や県公安委員会に認めてもらえる案をつくるために、どう対応するのか。

答 **建設部長**／現在、県公安委員会などの関係機関との調整を行っており、今後も鋭意努力して進めていきたいと考えている。

中核市への取り組みは

梶　泰久

問 平成二十七年四月、地方自治法が改正され、特例市制度が廃止されるとともに、中核市の人口要件が二十万人以上へと緩和された。地方制度調査会の答申では、両制度を統合することで、一層の事務や権限の移譲を可能にできることが、最も重要な点であるとされたことから、改正法の施行後五年間に限り、人口が二十万人未満であっても、中核市へ移行できる措置がされたが、この千載一遇のチャンスを生かして移行を推進する考えは。

答 **市長**／中核市への移行については、権限移譲されることにより、行政サービスのクオリティーが高まることなどのメリット及び専門職の雇用が必要となり、市に重い負担が来ることなどのデメリットがあるので慎重な検証、判断が必要であると考えている。

問 今から中核市を目指すとした場合、間に合うのか。

答 **市長**／期限等の詳細については、早急に検討し、中核市移行の可能性も含めて考えたい。